

田畑の草種

烏野豌豆・矢筈豌豆
(カラスノエンドウ)

マメ科ソラマメ属のつる性一年生～越年生草本。「エンドウ」と名がつくが「エンドウ属」ではなく「ソラマメ属」。本州以南の非灌漑期の水田、畑地、畦、道端、野原など日当たりのいい場所にごく普通。茎は方形で葉は偶数羽状複葉。葉の先端は3本の巻きひげとなり近くのものに巻き付き高さ150cmに達することも。

わが国には麦と一緒に伝わったとされ、今の我々と同じように弥生人や万葉人にも身近な植物であったはずである。しかしながら、万葉集に「豆」を詠った歌は1首だけ。

道の^へ辺^{うまら}の^はうれに^は延^{きみ}ほ豆の

からまる君をはかれか行かむ (巻20)

防人として上総の国へ赴く^{はせつかべのとり}丈部鳥が妻との別れを惜しんで詠んだ歌である。道端の野茨に絡まる烏野豌豆。その絡まる烏野豌豆のつるを一つずつ外すように君の絡んだ指を振りほどきながら、私は防人として出かけなければいけないのだよ、と詠う。万葉の時代から道端なんかで普通であった。

もう一つ。「豆」ではないが「万葉集」の山部赤人の春の歌、春の野にすみれ摘みにと来しわれぞ

野をなつかしみ一夜寝にける (巻8)

を本歌にして、

すみれ摘む懐かしき野に一人寝る

夜の向こうに烏野豌豆 (須賀乃山)

「烏野豌豆」は春の季語である。しかしながら、カラスノエンドウを詠んだ句はほとんど見つからない。そんな中で、

(公財)日本植物調節剤研究協会
兵庫試験地 須藤 健一

子供よくきてからすのゑんどうある草地 (川島彷徨子)

子等帰るからすのゑんどう吹きながら (照れまん)

道端や野原など、どこでも目につくカラスノエンドウであるが、神々の住む「不思議の世界」でも普通であったようである。こんな場面があった。2001年に封切られたスタジオジブリ制作の「千と千尋の神隠し」。その中盤、豚にされた父親と母親を救うため「お湯屋」で働く「千」こと千尋であるが、次第に父母を救うことを忘れかけてきた。そのとき、「ハク」が「千」に「元気が出るようにまじないをかけて作った」というおにぎりを渡す。そのおにぎりを食べながら「千」は号泣するのだが、その「千」と「ハク」のシーンでは、彼らの後ろに一面のカラスノエンドウが描かれていた。

神々の「不思議の世界」は、一年中花が咲き乱れる世界であり、「ツバキ」も「ツツジ」も「シャクナゲ」も一緒に咲いているような世界であるが、「千」と「ハク」のこのシーン、このシーンこそ「千と千尋の神隠し」の中の名シーンの一つだと思うのだが、そのシーンにどこにでも見られるカラスノエンドウが描かれていた、というのが印象的ではあった。

余談ながら、野豌豆には鳥と雀があるが、その間の「カスマ」というものもある。「からす」と「すずめ」の「^ま間」ということで「かすま」と名付けられたらしいが、名付けるのなら「かすま」「ぐさ」ではなく「かすま」「野豌豆」と名付けてもらっていたらと思うのは私だけだろうか。